

編集委員会委員

春成 誠

HARUNARI, Makoto

一般財団法人運輸政策研究機構構理事長

1. 広報誌の経験

筆者の個人的経験だが、今から30年近くの昔、某役所の広報誌の担当となった時のこと。たまたま当時の幹部は、「これまでの役所の広報誌は堅苦しくて読まれていない。できるだけ多くの人に読んでもらえるような読みたくなるような魅力ある広報誌にしてみたい。」との革新的考えの持ち主だった。

担当課長も、役人らしからぬ極めてアイデア豊富な方だった。そこで、課長の指示の下、とにかく柔らかく人目を呼ぶような企画を立て、役所幹部の対談には必ず女優や歌手など有名人を呼び、また、インタビュー記事の相手も売れっ子のタレントにするという具合にした。その結果、古い単語だが「サユリスト」や「コマキスト」が泣いて喜ぶような有名人と各局長との対談やそうした方々のインタビュー記事が実現した。当時の筆者を含む編集部の方々は芸能プロダクションよろしく日々芸能人やその事務所の人たちとの連絡に明け暮れたが、意外なことに有名人の方々も気軽に応じて頂いたばかりか、逆に、彼ら・彼女らは、取材現場でも、対談相手や我々スタッフに対し実に細かな気配りをされる方々であり、我々一同は、その人間性に感動することしきりであった。

話がそれだが、この新しい路線により、某役所の広報誌の発行部数は2倍以上となり、しかも一般の書店でも売れるようになった。例えば当時新橋駅に併設された書店にはこの広報誌が立派に並んで売られていた。ひと月に10部ほどは売っていたようだ(少ない数だが、もともと役所の広報誌などは政府刊行物センターあたりに置かれているのがせいぜいで一般の書店で販売されるのは稀有な例である。)

2. 読者は、季刊「運輸政策研究」をどう見ているか。

上記のような役所の広報誌とは勿論性格が異なるが、翻って、読者は、我が「運輸政策研究」をどう見ているのだろうか。

しばらく前から、知人、友人に会うたびに、「読んでいるか。どう見ているか」など感想を聞いてみた。

彼らの反応は、「学術誌なのでどうしても論文として定義も明確にし、論理もしっかりしないといけないので、文章が難しくなるのは仕方がないが、分かりにくい印象がある。」「難解な数式が多くて読めない。」「やたら脚注が多く疲れる。気軽に読めるものではないな。」といった声や「たまにはばらばらめくって興味があるものだけ読む。」が多かった。ひどい回答は「きちんとそこの書棚に積んであります。」というものもあった。

なお、「雑誌一冊が重すぎるのでカバンに入れて帰宅途中に読もうという気にならない。」という物理的苦情もあった(この点は既にこの春季号より紙質を軽くしほぼ解決している。)

3. 「運輸政策研究」には、学術誌の部分と広報誌の部分がある。

「運輸政策研究」は、学術研究と実務の橋渡し役を担う学術誌であり、その意味で上記の読者のご意見はやむなしとするしかないのだが、その前に読者の側及び編集側にも恐らく誤解があるのではないか。

厳密に言うと、学術誌の部分(=編集委員会が担当している部分)は、この「運輸政策研究」の内の概ね前半部分の論文と書評・新刊紹介の部分である。

それ以外の概ね後半部分の海外通信や運輸政策トピックス、コ

ロキウム、セミナー等は、運輸政策研究機構の活動紹介・交通運輸に関する情報紹介であり、いわば広報誌の部分(=担当は、編集委員会ではなく当機構の担当者である。)である。

と言ってもこの機関誌が始まったのは、当機構に運輸政策研究所が設立されたことを契機としており、全体として研究所の色彩が強く、どうしても庶民的な気軽な感じの薄い雑誌であるのは否めないが、全体として読みやすくするには、この二つの部分の混同を避け、それぞれ切り分けて編集方針を立て、実行していけば学術誌であり親しみのもてる広報誌であるという目標を達成することができるのではないかと思われる。

4. 学術誌の部分について

筆者は、編集委員会の末席に座ってほぼ2年となります。断言できませんが、筆者を除き編集委員会の面々は間違いなくこの学術の世界で実力のある方々であり、その方々が投稿されてきた論文を査読一修正一査読という厳しい審査を加えた結果として論文が掲載されています。

しかし、あまりに審査に精確を期するあまり、時期を失する恐れなきにあらずで今後の改善が望まれます。それから前回の春季号の編集後記にもありましたが、現代的な課題や実態と離れたテーマの論文掲載は考慮の余地があります。現状がこうなっている理由は、編集側で課題を設定せず、テーマは論文作成者・投稿者の自由とするという、余りにも民主的な手法にあります。読者が望んでいる、また勉強したがっている現代的なテーマを編集委員会側で設定する手法を一部導入しては如何かと思う次第です。

また、学術論文のためか、政策提案の部分が控えめな表現にとどまるものが多いように感じます。読者からみて論文の持つ主張が明確に伝わりにくいのではないかと思いますので、論文の持つ政策提案としての意義を、論文作成者に代わって編集委員会としてまとめて読者に提示しては如何かと思います。

5. 広報誌の部分について

広報誌の部分は、どんどん読者の視点に立って、当機構の活動全般の紹介や幅広く現代の交通運輸に関する話題を、やさしく柔らかく提供すべきです。

論文とするには無理でも今現在問題となっていることに関する行政や産業界の実務家や若手研究者のレポート、交通に関する事象、実験、話題性のある事件等精力的に取り上げるべきです。

現代社会は、秒単位で、しかもグローバルに変動しています。交通運輸に関する時時刻刻の状況をやさしく解説し、当運輸政策研究機構の積極果敢な活動の実態を報告すべきです。

もちろん冒頭申し上げたような女優さんやタレントを登場させなければならぬと言うものではありません。

以上勝手な意見を申し述べましたが、これらは、ひとえに編集委員会の一員かつ編集担当の一員として、この「運輸政策研究」がより多くの読者の方々に愛され、研究と実務の橋渡しに貢献できるよう筆者自ら努力すべきことを整理したものであります。

昨今の標語ではありませんが、「読者倍増計画」を実行する所存です。